

泡（うたかた）-2004- たすに



海の空こ 五行歌集

未来のことがわからないから

毎日

楽しくて

毎日

苦しくて

「癌になる」なんて

おもっても いなかった

2004年のワタシ



そして

彼らは

じっと見ている

大人になることが

どういう事かを

人だから

人

それ以上にも

それ以外には

なれはしないのに

想いは

言葉に

張りついて

嘘に

なる

地球の裏では

眠って

私の

いる間

足の足跡の裏に

地球も

誰かの

眠って

足の足跡

いいんだよ

うそなど

いつか

いつでも

本と本と

つける

の間に

自分以外の

死ねたら

人になら

幸せ

みんな

いつか骨になり

地球になる

そういがみ合わなくとも

同じじゃないか



言葉が

通じない

のではなく

心が

通じないのだ



時計の
文字盤でなく
歯車や
ネジで
いたい日



貴婦人のように

足をひそめて

太陽の

後ろから

夜はやってくる

たくさん誤解で

できている

人間関係は

六回までは

我慢する

闇をまとめて

都会に放そう

きつと

冷静に

なれるはず

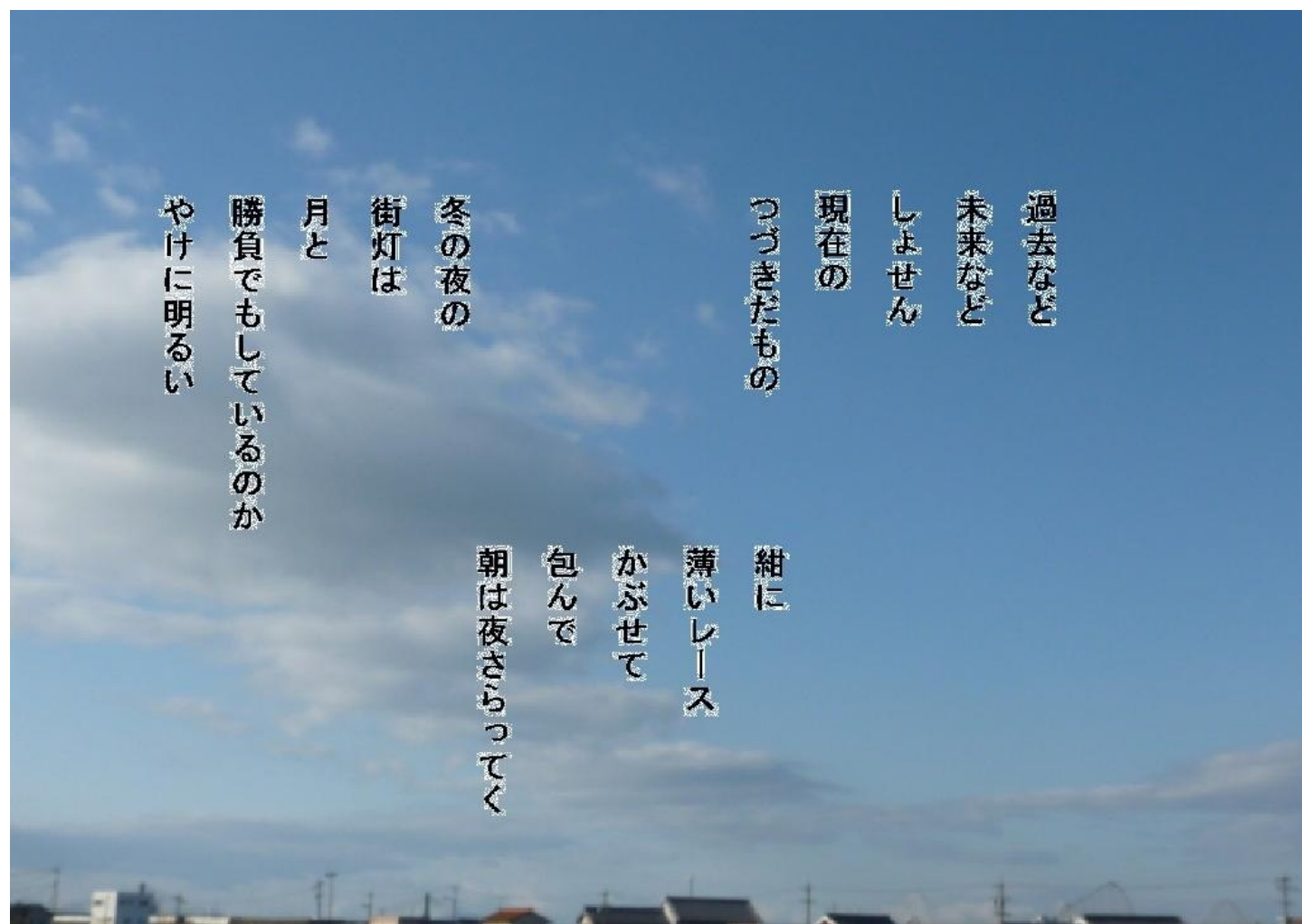
レジスタが

Fになると

私も一緒に

明日に

繰り越される



内蔵の

位置だつて

ちよつとずつ

違うから

ひとはひとり

ときおり

すがつてしまう

この

ちいさな

お守りに

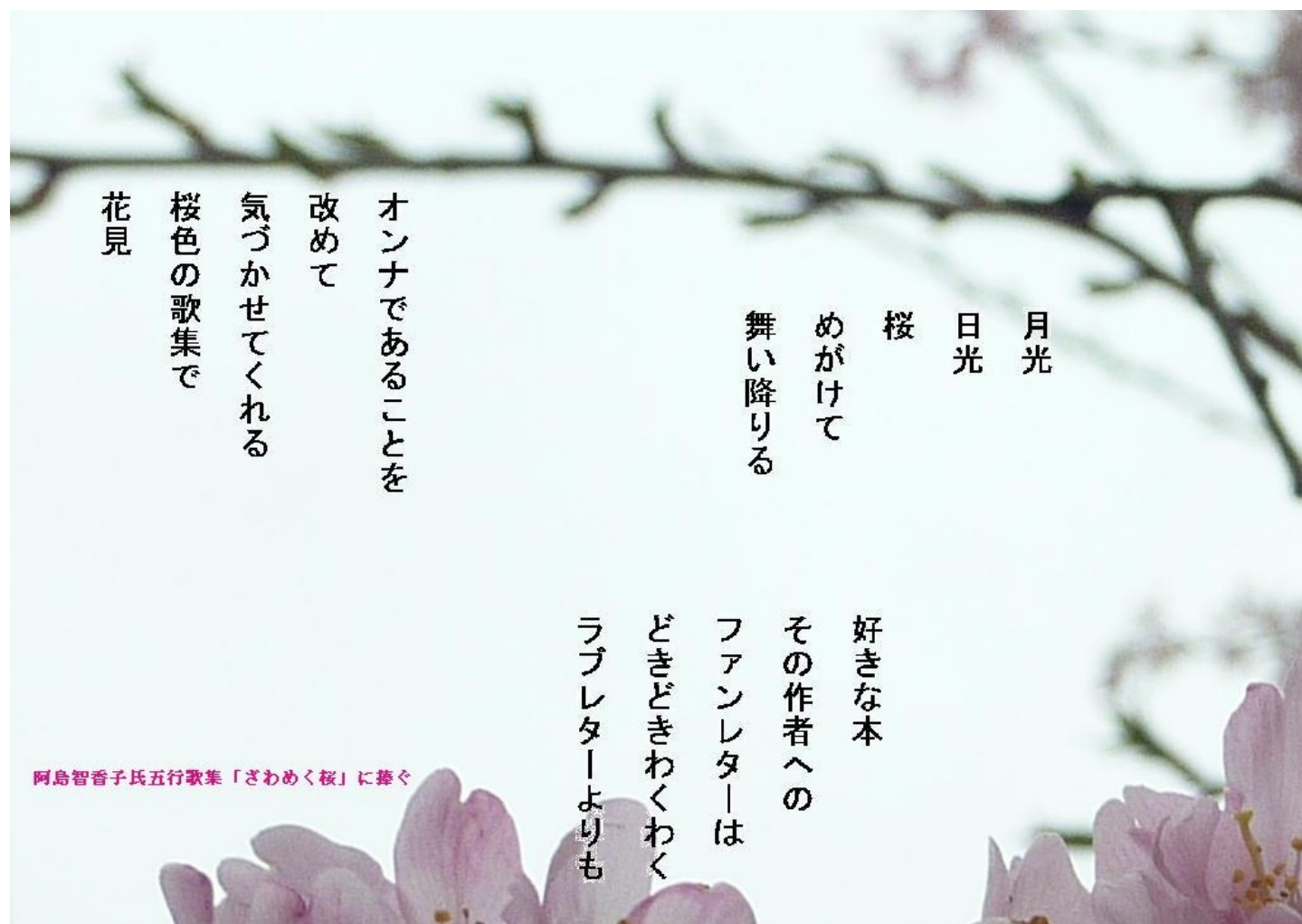
天辺に

いくのなら

捨てなきや

だから

底辺で漂う



月光
日光
桜
めがけて
舞い降りる

好きな本
その作者への
ファンレターは
どきどきわくわく
ラブレターよりも

オンナであることを
改めて
気づかせてくれる
桜色の歌集で
花見

阿島智香子氏五行歌集「ざわめく桜」に募ぐ



じわり

滲んだ

届くには

時間がかかる

哀しみを受け止める

また違う

液体を注いで

いったい

いくつ重なれば

自分になるの

清濁

白黒

混じって

ヒト

人となる

ベビーカーから
乗り出すよう
見ている視線の
先は
春



ほんとうは
木々に
育てられているのだ
水やりしてる
我々が



じつと

アスファルト

踏みつけられても

地面を

守る

そんな暗やみも

また

自分だと

抱きしめて

月を浴びる

仕上げは

罵倒

冬の

言葉は

つららだ





ここで
こうして
話しをしているだけで
幸せな



手の中
まるく
穴
埋めて
くださるかしら

自分の中の

宇宙か

宇宙の中の

自分か

まだ決めかねている



彼の匂い

たどり

彼の枕で

眠る

彼を追い出して

滴りおちそうな

水滴を

じっと

こらえる

夜中の蛇口



ひやり
と
その手
包んで
あたためてあげる

丁寧な
関係を
ひとつ
秋の夜長に
築きませんか





誰とも

話したくない

そんなとき

山手線で

ぐるぐるまわる



風は

香らないから

様々な

香り

運べるんだね

手の関節

二十八

手のひら

二つ

君に触れられる回数



楓の
プロペラは
彼の心の種
くるりくるりと
とんでいく



しよせん
真似事から
脱しない
言葉の
羅列だ

昨日の君の

疲れや憎しみ

残さぬように

ハイターいれて

洗濯開始

たまってた

小さな滓

ワインも

誰か

憎いのでしょうか？

きつと

足の小指

ひとつ分だけの

すれ違い

なのに

にくしみ

と

かなしみ

おなじ色のしみで

つながって

ランドセル

しよった

女の子たちの笑い声

自動ドアだって

慌てて開く

おうちに一人の

今夜は

ブラあんどショーツで

夕飯

食べちゃおうかな

針金ハンガーだって

もとは

一本の

交差すらない

まっすぐな線

産まれたときから

音のない世界に住む

美しい人の

おしゃべりな手に

酔っている



背と背
あわせて
わたしたち
錨となつて
海へ沈む

世界は
言葉に
満ちているのに
君に届けたいのは
好きだけ

その月を
越えてきて
そらが
もし
つながっているのなら

真実は
きつと
自分の中にある
黙って
目を閉じる



それでも
泣くことも
笑うことも
生きているから
できること
あの人の
カタチ
のこして
空気が
ゆれた



掬おう

人差し指で

光を

底にある

その涙の

手は

大きい

ひとの

ヒーローになる

包丁を持つと

足跡つけておく

こっそり

道の端に

足跡もついていない

だれの

ああもう

今日を

掃除機で

吸いこんじゃいたいくらい

の雨空

許す

許さないなんて

関係ない

最初から君は

許されてる

誰かを憎むことで

君が

生きていけるなら

喜んで

憎まれよう

ここは
まだ
空の途中
下へも上へも
望めばゆける

五行歌を始めて、8年近くたちました。

処民さんの掲示板からそろそろと始め、
草壁先生に会い講義を受け（途中、癌でやめちゃうのですが...）
もの凄く飽きっぽい私が、ネットや本誌、歌会を通じて、
なんとなく続けてこれたのは誰かに伝えたかったから...
それは不特定多数の誰かではなくて
その日その時に対峙していた 彼だったり、兄弟だったり、友だったり...特定の人ばかり

おしゃべりが不得意で活字ばかりが友達だった私に
そのときの思いを伝えるツールとして、五行歌との出逢いがありました。
ですから、今回、2004年の癌以外の歌を纏めながら読み返し
これはあの人への！
これは彼への！
それはあいつへの！
というカタチで
頁分けすることを試みてみました。

私の歌は、泡のように誰にでも読めて、
でも私だけしかわからない言葉で詠むことが多いようです。
それは伝えたい人が特定されていて、その人だけ伝わってほしいからです。
他の人に伝わらなくとも、たった一人に伝えたい！
それがいつも私の五行歌の根底にあります。
沢山の詩歌の中で、何故か五行歌でなければ伝えられなかった思いがあります。
それは私の心の軌跡であり、生きてきた証であり、足跡です。

何度も何度もやめようと思う度に、そのやめようという思いすら五行になってしまうくらい...
五行歌という出逢いに感謝しております。

いつも支えてくれる彼。

そしてきっかけをくださった処民さま。

創始者の草壁先生。

なかなか顔を出せないのに、いつも笑顔で迎えてくれる歌会の皆さま。

こういう発表の機会を教えてくれた井椎しづくさん。

いつも励まし後押ししてくれる 伊東柚月さん、金沢詩乃さん。

そしてネットでの歌友の皆さま...

全ての皆さまに感謝をささげ、幸せを頂くばかりで、なかなか返せない分の感謝もこめて
この歌集を纏めました。

いつもありがとうございます。

まだまだ、ゆるく、毎年毎に詠んだ歌をまとめていきたいと思います。

私の歌の何かが

読んでくださったあなたの心の端にひっかかれば、

それはそれはとても嬉しく幸せ♪で月まで飛んで行ってしまうかもしれません...

そして、それらがまた、私の中で五行歌になっていきます。

つぶやきであり、日常でもある、私の五行歌を読んでいただき、ありがとうございました。

海の 空こ 拝

泡（うたかた） 2004 たすに

<http://p.booklog.jp/book/32494>

著者：海の空こ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/u3no/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32494>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32494>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.